

関東十ゼミ・商学会賞受賞報告

第9期生 勿本 慎弥

◆関東十ゼミ討論会とは...?

関東十ゼミ討論会は、毎年度1回、関東圏にあるマーケティングを専攻しているゼミが集結し、12月の発表に向けて研究発表・討論を行う場として開催される。それぞれ研究分野が違うゼミ、興味が違う学生と触れ合うことで互いを高めあい、自分たちの研究テーマの幅を広げることを目的としている。関東十ゼミ討論会では、「冠テーマ」と呼ばれるメインテーマが定められ、各ゼミは1つないし幾つかプロジェクト・チームで参加し、研究論文を執筆・交換すると共に、討論会当日にプレゼンテーションを行う。2009年度から、プレゼンテーションには、日本マーケティング協会のマーケティング・セミナー受講生の社会人の方々と、参加大学の大学院生の方々の採点が行われるという方式をとっている。なお、討論会の名前の由来はゼミの数であるが、参入退出が自由なため、参加ゼミは年度によって異なる。

◆執筆論文の概要

偽物研究には、偽物製品を購入して高く評価した消費者が、正規製品にスイッチする傾向があるという説と、逆に偽物製品を再購入する傾向があるという説がある。この見かけ上の矛盾を解消するために、本論は、「品質」概念を、偽物製品が正規製品を模倣している製品部位の品質を意味する「外的品質」と、模倣していない製品部位の品質を意味する「内的品質」に二分した上で、偽物製品購買者が偽物製品の購買経験を手掛かりにして偽物製品と正規製品の「外的品質」および「内的品質」を評価し「購買意図」を形成するまでの過程を描いた独自の購買意図モデルを構築した。共分散構造分析の結果、偽物製品の内的品質が高ければ偽物製品が再購入される一方、偽物製品の外的品質が高ければ正規製品の外的品質も高いと類推され、むしろ正規製品へのスイッチが促されるということが見いだされた。以上のように、偽物製品の評価において品質を一元的に捉えたために生じた矛盾を解消し、偽物製品を購入した経験のある消費者が正規製品を購入する心理プロセスを示した本論は、今後のマーケティング研究およびマーケティング実務の発展につながる有意義な研究となることを期したい。

◆執筆後記

今年度の十ゼミチームは商学会賞をとりに行くために組織されたチームである。それは、少人数ゆえに「商学会賞を狙えばどうかな」と言われ、私たちが本気になったためである（あの時に言ってくれた方々も私たちと同様、本気で言ってくれていたと信じたい）。

ぼんやりと商学会賞はすごい賞なんだろうな考えていた前期では、私たちはまるで見えない目標を追っているようで、正直つらい時期が続いていた。夏休みに入ると、既存研究レビューの嵐に襲われ、迷いながらも懸命に研究をすすめた。まだつらい時期は続いていた。後期が始まるとすぐに、5週連続の発表が始まり、発表の準備と論文の執筆の板挟みをくらい、つらかった。そして、商学会賞は研究を認めもらうための賞であると考えようになった提出直前では。私たちは言葉にできないものに追い込まれていた。そして、「採択可」という三文字が、私たちのつらい経験をすばらしい経験へと変えてくれた。

関東十ゼミ討論会で最優秀賞・論文賞、そして学内での商学会賞。いただいた3つの賞は、私たちの200日をこえる研究活動の成果を、確固たるものにしてきている。しかし、まさか3人の力だけで賞をもらったなどと勘違いしてはいない。同期である9期生のみんな。商学会賞の提出期限を考慮して、スケジュール調整してくれて、ありがとう。9期生との切磋琢磨こそ、十ゼミチームのやる気を作ってくれたのだと感じております。関東十ゼミ討論会本番で優勝した瞬間、同期が誰も会場にいなかったけれど、それも含めて9期生の良さってことで受け止めています。

8期生の先輩方と大学院生の方々、私たちに欠けていることを厳しく、そしてより厳しくご指導いただいたことは、感謝しきれないです。正直に言うと、「それはダメだ」という先輩方の一言がつかったです。それと同時に「なぜダメかという、〇〇だからだ」という先輩の一言が、私たちの成長を期待してくれているのだと嬉しく思いました。提出期限直前に指導と添削をお願いする場面ばかりでしたが、丁寧に指導いただき、何度も添削していただきました。8期生の先輩方と大学院生の方々の指導があったからこそ、十ゼミチームの今があるのだと感じております。本当にありがとうございます。

そして、小野晃典先生。私たちが悩める時や道に迷う時、休日や真夜中でさえも、十ゼミチームのために時間を割いていただきました。私たちが先生に何度も同じ質問をしてしまっても、目指すべく方向を教えてくださいました。先生から力強いご指導をいただけたことで、結果だけでなく、そのプロセスさえも、素晴らしいカタチとして残り、それを感じることができております。ここにある写真は、ただ私たちの論文が完成した瞬間というわけではなく、今までにない充実感や達成感を持つことのできた瞬間を表しているものです。心から小野ゼミ生で良かったと思っております。誠に感謝いたしております。



投稿締切前夜、都内某所の先生ご滞在中のホテルにて。